

貨幣起源論の系譜

——アリストテレスからスミスまで——

新 村 聡

I 二つの貨幣起源論

アリストテレス以来二千年以上におよぶ貨幣論の歴史において、くりかえし問われてきたのは、貨幣がなぜ、いかにして成立したか、という貨幣の起源をめぐる問題である。最大の理論的対立は、貨幣の本源的な機能が価値尺度と流通手段のどちらであったか、そして、貨幣の成立は価値尺度と流通手段のどちらに即して説明されるべきかという点にあった。この難問が、貨幣について考察した哲学者たちをどれほど悩ませたかということは、アリストテレス、プーフェンドルフ、ハチスン、スミス、マルクスらが、いずれも、貨幣の起源に関する見解を、自己の複数の著作で変更している事実からもうかがうことができる。以下で考察するように、アリストテレス『ニコマコス倫理学』、プーフェンドルフ『自然法と国際法』、ハチスン『道徳哲学体系』、スミス『法学講義』では、貨幣の起源が価値尺度としての貨幣の必要性から主として説明され、他方で、アリストテレス『政治学』、プーフェンドルフ『義務論』、ハチスン『道徳哲学綱要』、スミス『国富論』では、貨幣の起源が流通手段としての貨幣の必要性から説明されている。マルクスも、初期には貨幣の起源を流通手段機能から説明していたが、後に価値尺度機能から説明するようになった。今日でも、経済学者たちの貨幣の起源に関する見解は、大きく分かれている。

スミスの『法学講義』と『国富論』との間に、貨幣形成論をめぐる立場の

相違ないし矛盾があるかどうかという問題は、「貨幣形成論におけるアダム・スミス問題」⁽¹⁾と呼ばれる。かつて拙稿「スミス価値論の成立過程」⁽²⁾では、この問題を、スミス価値論全体の成立過程と関連させて考察した。その後、貨幣の起源をめぐる二つの見解の対立は、たんにスミスひとりの問題ではなく、アリストテレス以来の貨幣論を貫く根本問題であることに気づき、あらためて考え直したのが本稿である。以下では、アリストテレスからスミスまでの貨幣起源論の歴史を概観することによって、二つの系譜の対立の根拠について考えることにしたい。

Ⅱ アリストテレスの貨幣起源論

アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』において、貨幣の価値尺度および流通手段の二機能を事実上区別して把握し、それぞれとの関連で二つの貨幣起源論を述べている。まず第一に、アリストテレスは、価値尺度としての貨幣の起源を次のように説明する。

「交換のための結びつきは二人の医者からは生まれず、医者と農夫、一般的に言って、異なる種類の均等ではない人々から生まれる。これらの人々は、均等にされなければならない。交換の対象となるすべてのものが何らかの意味において比較しうるものでなければならないのはこのためである。貨幣はそのために生まれてきたのであり、それゆえある意味における媒介物となる。すなわち、貨幣はすべてのものの価値をはかり、したがってどちらの価値が他方を上回るか下回るかをも測る。こうして、貨幣は、どれだけの数の靴が1軒の家屋または一定量の食料と等しい価値であるかを測る。」⁽³⁾

(1) 武田信照『価値形態と貨幣』梓出版社、1982年、30ページ。

(2) 早坂忠編『古典派経済学研究Ⅲ』雄松堂出版、1986年、所収。

(3) アリストテレス『ニコマコス倫理学』、邦訳『アリストテレス全集』岩波書店、第13巻、159ページ。訳文は、英訳や他の邦訳を参照して変更した。

アリストテレスは、交換的正義を実現するために、交換される二商品の価値が等しくなければならず、そのためには、それぞれの商品の価値を測り、それらを比較するための媒介物つまり共通の尺度として貨幣が成立するという。アリストテレスがここで想定している交換は、靴と家屋や食料との物々交換（直接的生産物交換）であり、流通手段としての貨幣によって媒介される本来の商品交換ではない。貨幣はまだ流通手段になっていないが、物々交換における二商品の交換比率を計算するための媒介物として、価値尺度としての貨幣が成立するのである。

アリストテレスは、つづいて流通手段としての貨幣の起源を次のように説明する。

「ところで、この比例関係は、交換されるものが何らかの意味に置いて均等なものでなければ成立しないであろう。それゆえ、先に述べたように、すべてのものはある一つのものによって測られなければならない。そして、この一つのものとは、本当は需要であり、需要がすべてのものを結びつける。人々が何も必要としなかったら、あるいは同じ程度に必要としなかったら、交換は成立しないか、同じようには行われまいだろう。約束にもとづいて、貨幣がいわば需要の代表者となっている。それゆえこれは貨幣（ノミスマ）という名称を持っている。すなわち貨幣は自然ではなく人為（ノモス）によるのであり、貨幣を改変したり無効なものにするのはわれわれ自身の自由なのである。」⁽⁴⁾

アリストテレスの説明はあまり明快とは言えないが、次のような意味であろう。共通尺度としての貨幣が成立して、二商品の価値が測られ等置されても、ただちに交換が実現するわけではない。二商品の等置すなわち二商品の交換比率の決定は、交換の必要条件ではあっても十分条件ではない。二商品の交換が実際に行われるためには、それぞれの商品に対する相互的な需要が

(4) 前掲邦訳, 159-60ページ。

同じ程度に存在しなければならない。アリストテレスは、物々交換が実現するためには、お互いに相手のものを欲し、しかも同じ価値量だけ欲するという相互的欲望の一致が必要であることを明確に認識した。この物々交換の困難を解決するのが、人々の「約束」によってあらゆるものと交換できることを保証された貨幣である。社会的合意によって一般的受容性（一般的直接的交換可能性）を与えられた貨幣は、一般的交換手段（流通手段）となり、相互的欲望が存在しない場合にも、貨幣を媒介物として交換が行われるようになるのである。

さらにアリストテレスは、貨幣が人々の合意によって一般的受容性を保証され流通手段として機能するようになると、そこから蓄蔵貨幣（価値の貯蔵手段）としての機能が生ずることも指摘している。「われわれが今は何も必要としなくても、もし何かが必要になれば交換するという将来の交換のためのいわば保証として貨幣を持っている。人は、貨幣を持っていけば、所要のものを得られるはずだからである。」⁽⁵⁾

アリストテレスは、貨幣が、人々の合意によって成立する人為的な制度の所産であることを明確に認識した。さらにかれば、貨幣を成立させる社会的合意には、ある特定商品を共通の価値尺度にする合意と、ある特定商品を流通手段にする合意との二つがあり、この二つの異なった合意によって貨幣の二大機能が成立することを示したのである。そしてアリストテレスは、価値尺度としての貨幣は物々交換においてすでに必要であり、流通手段としての貨幣よりも先行すると考えていたように思われる。

以上の『ニコマコス倫理学』における貨幣起源論に対して、『政治学』ではまったく異なった貨幣起源論が述べられている。アリストテレスは、物々交換の起源から説明を始める。

「最初の共同体（すなわち家）においては、明らかに交換術の働きを容れ

(5) 前掲邦訳，160ページ。

る余地がない。むしろその働きは、共同体がいっそう拡大してからのことである。なぜなら、先の共同体に属する人々は何でも同じものを共同で所有していたのに対して、あとの共同体の人々はいくつかの独立な家に分かれていたので、それぞれ多くの異なったものを所有しており、それらの異なったものを、必要に応じて、今日なお野蛮な民族の多くが行っているように、物々交換によって自分のものと交換しなければならなかったからである。』⁽⁶⁾

物々交換が発展すると、貨幣が成立する。

「これから、しかるべき道理によってあの取財術が生じてきた。というのは、欠けているものを輸入し、余分に持っているものを輸出することによって、相互扶助が今までよりも国と国との間で行われるようになったときに、貨幣の使用が必然的に工夫されるにいたったからである。というのは、自然によってもたらされる生活必需品は、いずれも持ち運びが容易ではないからである。ここから、それ自体有用なものの一つであって、生活のために取り扱いやすいという効用を持っているもの、たとえば鉄とか銀とか、あるいは何か他にそういうものがあれば、そのようなものを交換のためにやり取りしたりしようということを相互の間で取り決めたのである。』⁽⁷⁾

貨幣は、人々が「相互の間で取り決めた」ことによって、すなわち人々の社会的合意によって成立したという見解は、二つの著作に共通している。しかし『ニコマコス倫理学』と比べて、『政治学』の貨幣起源論は二つの点で大きく異なっている。一つは、価値尺度としての貨幣にまったく言及せずに、物々交換の発展から流通手段としての貨幣の成立を直接に説明していることである。もう一つは、流通手段としての貨幣の起源について、物々交換における相互的欲望の一致の困難には言及せずに、他の国との交易において携帯

(6) アリストテレス『政治学』、邦訳『アリストテレス全集』岩波書店、第15巻、24ページ。

(7) 前掲邦訳、24-5ページ。

の容易な手段が必要であるという理由から説明していることである。おそらくアリストテレスは、もっとも初期の交換は、共同体の内部ではなく、共同体と他の共同体との間の余剰生産物の交換として成立したので、最初の貨幣もまた共同体相互の交換において成立したと考えていたのであろう。アリストテレスの二つの著作における異なった二つの貨幣起源論は、かれの継承者たちに大きな影響を与えることになった。

Ⅲ プーフェンドルフの貨幣起源論

プーフェンドルフは、貨幣が人々の合意に基づいて成立した人為的的制度であると主張するアリストテレスの見解を忠実に継承した。プーフェンドルフによれば、「この貨幣の機能は、自然的性質から生ずる必然性によってではなく、人々の付与と合意によって与えられた」⁽⁸⁾のであり、「人々の中の合意によって、あらゆる人は、貨幣と引き換えに、販売されているどんな物も手に入れることができる力を与えられるのである」⁽⁹⁾。プーフェンドルフは、貨幣だけでなく、商品の価値、所有権、言語の意味、国家などもすべて自然的存在とは異なる道徳的存在であり、人々の暗黙のまたは明示的な合意によって人為的に形成される制度であると主張した。

プーフェンドルフは、『自然法と国際法』において、価値論の冒頭で価値概念を導出するときに、価値尺度としての貨幣の起源を次のように論じている。

「所有される物の性質はさまざまであり、人間の必要に同じように役立つのではないという事実を考慮しなければならない。同じものであっても、そ

(8) Pufendorf, S., *On the Law of Nature and Nations in two books*, translated by C. H. and W. A. Oldfather, London, 1964, p. 691.

(9) *Ibid.*, p. 690.

の諸部分があらゆる点で同じではない。これらのものが複数の人々に属し、性質の異なるものが相互に交換されなければならないということがしばしば生ずる。それゆえ、人々の合意によって、ある尺度が諸物に設定され、その尺度により性質の異なるものが相互に比較され等置されなければならないのである。」⁽¹⁰⁾

プーフェンドルフは、二つの自然的性質の異なる商品が、交換のために相互に比較され等置されるためには、「道徳的量」としての価値を測る尺度が人々の合意によって形成されなければならないと主張する。このような価値尺度の起源に関する説明は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の見解を継承したものである。

またプーフェンドルフは、流通手段としての貨幣の起源を、物々交換の不便の回避から次のように説明している。

「ほとんどの国民が原始的な素朴さを放棄したあと、人々の仕事や交易が日々増加するにつれて、旧来の通常価格〔物々交換のこと……引用者〕は、それらを遂行するためにもはや十分ではないことを人々は容易に認識した。というのは、交易は財貨の交換だけに存しており、人々の労働は労働または現物だけで支払われたからである。しかしわれわれの奢侈的欲望が非常に多くのものを欲するようになり、われわれはもはや自国で生産されるものには満足せず他の気候の産物を求めるようになったときに、他人がわれわれの望むものと喜んで交換するようなものを確保すること、すなわち他人の財貨の等価物を確保することは、人間にとって容易なことではなかった。……

それゆえ、高度な文化を享受する大部分の国民にとっては、合意により、ある特定のものに卓越価値を設定することが最善に思われた。それは他のものの適正な価値の尺度として役立つ、他のものがそれに十分に包摂されると、人はそれを媒介物とすることによって、販売されるどんなものも自分自

(10) Ibid., p. 675.

身のために手に入れ、あらゆる商業を遂行し、すべての合意を非常に便利に取り決めることができるようになったのである。』⁽¹¹⁾

プーフェンドルフは、他の国との交易の開始とともに、物々交換では等価物の提供が困難になり、そのときに貨幣が成立したと説明する。すでに見たように、アリストテレスは、流通手段としての貨幣の起源を、『ニコマコス倫理学』では物々交換における相互的欲望の一致の困難から、また『政治学』では他の国との交易の便宜から説明していた。プーフェンドルフの説明は、アリストテレスの二つの議論を折衷したものであった。そしてかれは、貨幣の二機能の成立順序については、アリストテレスと同様に、価値尺度としての貨幣が流通手段としての貨幣よりも先に成立したと考えていた。

しかしプーフェンドルフは、『義務論』では、価値論の冒頭で価値尺度としての貨幣に言及することをやめて、価値概念を二商品の比較と等置から直接に導出するようになった⁽¹²⁾。そのために『義務論』では、価値尺度としての貨幣が成立する必然性はどこにも説明されていない。貨幣の起源については、物々交換における相互的欲望の一致の困難を回避するために流通手段としての貨幣が成立したことだけが述べられるにすぎないのである。

Ⅳ ハチスンの貨幣起源論

ハチスンは、アリストテレスやプーフェンドルフと同様に、貨幣が人々の合意によって成立したと考える。しかしかれは、貨幣を成立させる人々の合意をできるだけ自然的かつ漸次的な過程として説明しようとした。価値尺度としての貨幣の成立は、次のように説明されている。

(11) Ibid., p. 690.

(12) Pufendorf, S., *On the Duty of Man and Citizen*, ed. by J. Tully, translated by M. Silverthorne, Cambridge, 1991, p. 93.

「商業のための諸財の価値を決定するとき、それらは両方の側で何か共通の尺度に還元されるに違いない。〈これこれの日数の労働の価値に、またはある量の穀物に、またはこれこれの数のある種類の牛に、ある尺度または重量の大地の果実に、ある重量の特定の金属に等しい〉のようにである。それに対する一般的需要が存在していたとくに共通の有用性を持つものが、容易に標準または共通尺度とされたであろう。それを固定したときに、さまざまな国民は、慎慮や環境に応じてさまざまな素材を選択したであろう。」⁽¹³⁾

ハチスンは、物々交換において二商品の交換比率を決定するとき、それぞれの商品の所有者が自己の商品の価値を測る共通の価値尺度として貨幣が成立したと考える。この価値尺度形成論は、アリストテレスやプーフェンドルフの場合とほとんど変わっていない。かれの見解の新しい点は、アリストテレスやプーフェンドルフがあたかも一度に行われるかのように述べていた共通の価値尺度の成立過程を、段階的に説明しようとしたことである。ハチスンによれば、共通の価値尺度は、最初は交換の当事者二人だけがその交換に限って使用するものであり、何を共通の尺度とするかは、交換当事者二人の私的かつ一時的な合意にすぎなかった。しかしやがて労働、牛、穀物、金属などのさまざまな商品が共通の価値尺度として一時的に使用されたあと、しだいに特定の一財に共通の価値尺度を固定する社会的合意が成立していったのである⁽¹⁴⁾。このように、共通の価値尺度に関する社会的合意が漸次的に

(13) Hutcheson, F., *A System of Moral Philosophy*, vol. 2, in *Collected Works of Francis Hutcheson*, vol. 2, Hidesheim, 1969, p. 55. 〈 〉は原書では“ ”。

(14) のちにマルクスも、ほぼ同じ認識を示している。「第三の商品は、他のさまざまな商品の等価物となることによって、たとえ狭い限界内においてにせよ、直接的に一般的または社会的な等価形態を受け取る。この一般的等価形態は、それを生み出す一時的な社会的接触とともに発生し、それとともに消滅する。この形態は、あれこれの商品に、かわるがわる、かつ一時的に帰属する。しかしそれは、商品交換の発展につれて、もっぱら特殊な商品に固着する。すなわち貨幣形態に結晶する。……貨幣形態が固着するのは、外部から入ってくるもっとも重要な交易品か……内部の譲渡される所有物の主要要素

形成されたという認識は、共通の価値尺度として選ばれたものは、「それに対する一般的需要が存在していたとくに共通の有用性を持つもの」であったという認識と結びついていた。プーフェンドルフは、貨幣が自然的存在ではなく人々の合意だけに基づく道徳的社会的存在であり、人々の合意しだいでどんなものでも貨幣になりうることを強調した。しかしハチスンには、貨幣に対する欲求が、ある商品を貨幣とする人々の合意から生ずることを認めつつも、その合意に先だって、貨幣となる商品はその自然的性質自体から人々の一般的欲求の対象であったと考えたのである。金銀は、もともとその自然的性質によって人々から欲求されるものであったからこそ、それを貨幣とすることによって一般的欲求の対象とする社会的合意が容易に成立したのである。もし貨幣を形成する人々の合意が、貨幣素材の自然的性質に対する人々の欲求を前提するとすれば、何を貨幣として選ぶかは、人々の欲求に、したがって人々の「環境」に左右されることになる。のちにスミスは、この認識を発展させる。

ハチスンは、金銀が貨幣として選ばれた理由を説明するために、「もっとも完全な標準に必要な諸性質」として、次の4点をあげている。第1は、人々の一般的な欲求の対象であること、第2は、稀少性ゆえに高価値で携帯が容易なこと、第3は、小部分に分割可能なこと、第4に、耐久的で磨耗も腐敗もしにくいことである。金銀は、貨幣素材にふさわしいこれら4条件をすべて満たすので、全文明国で標準になったとされる。

「私の穀物のわずかな量を欲する人は、それと引き換えに、かれの家畜を私に与えないであろう。なぜならかれの家畜は分割することができないからである。私はおそらく1足の靴を欲しいと思うであろう。しかし私の牛ははるかに高価値で、相手は牛を必要としないかもしれない。私は遠い国へ旅行

をなす使用対象、たとえば家畜のようなものである。」Marx, K., *Das Kapital*, Bd. 1, *Marx Engels Werke*, Bd. 23, Berlin, 1962, S. 103. 邦訳『資本論』新日本出版社, 1982年, 第1巻, 151-2ページ。

しなければならぬが、たえがたい費用をかけなくては、穀物を私の食料として携帯することはできないし、ワインは運搬中に悪くなるであろう。したがって、人々が稀少な金属である金銀の用途を装飾品や家庭用品に発見したときに金銀への需要が生じ、まもなく人々は、金銀が交易にもっとも適した標準であることも見いだしたのである。」⁽¹⁵⁾

ここでハチスンが説明しているのは、金銀が流通手段としての貨幣に選ばれる理由である。かれは、ある特定の一商品が共通の価値尺度として選ばれることを説明したあと、金銀が価値尺度として選ばれる理由も、また何らかの商品が流通手段になる必然性も説明しないまま、金銀が流通手段として選ばれる理由の説明へと移ってしまっている。のちにスミスが明確に区別して論ずるように、貨幣起源論は、①何らかの財が価値尺度になる必然性、②金銀が価値尺度になる必然性、③何らかの財が流通手段になる必然性、④金銀が流通手段になる必然性、の4点を説明しなければならない。しかしハチスンの貨幣起源論では、①から、②と③をとばして、④へ論理が飛躍している。ハチスンの混乱の理由は、かれが貨幣の価値尺度機能と流通手段機能を明確に区別せず、また、価値尺度となる貨幣素材に必要な性質と流通手段となる貨幣素材に必要な性質とを区別して把握していなかったことにある。ハチスンが貨幣に必要であると列挙した4つの性質は、いずれも流通手段に必要な性質ばかりであり、価値尺度に必要な性質としての均質性は含まれていない。

ハチスン自身、以上述べた『道徳哲学体系』の貨幣起源論に満足できなかったのであろう。『道徳哲学綱要』では、価値尺度としての貨幣の起源に関する先に見た叙述がすべて削除され、貨幣の起源は、物々交換の困難から次のように説明される。

「しかし次のようなことがしばしば起きるだろう。私は隣人が豊富に持つ

(15) Ibid., p. 56.

ているある財を欲しいと思ひ、私は自分自身の使用をこえた他の財を豊富に持っている。しかしかれは私の余剰の蓄えのどれも必要としないかもしれない。あるいは、私が必要をこえて蓄えた財は、私が隣人から欲しいと思うすべてのもの価値をまったく上回り、私の財は大きな損失なしに部分に分割することはできない。こうしたことがしばしば起きるだろう。交易を維持するためには、何らかの種類の標準財に合意しなければならない。それは、あらゆる他のものに対する価値の尺度として決められたものであり、非常に一般的に需要されるにちがいないので、欲しいと思うどんなものもそれで手に入れることができるから、だれでも他の財貨と交換にそれを喜んで受け取る。そして実際、何かがかうしてあらゆる価値の標準とされるや否や、それはあらゆる目的に役立つので、それに対する需要は普遍的となる。」⁽¹⁶⁾

ここでは、貨幣が成立する必然性は、物々交換における相互的欲望の一致の困難を回避することに求められる。これは、アリストテレスやプーフェンドルフ以来の流通手段形成論に復帰するものであった⁽¹⁷⁾。

V スミスの貨幣起源論

スミスは、プーフェンドルフやハチスンが試みながらも成功しなかった価値尺度としての貨幣が成立する必然性の論証に『法学講義』で取り組む。問題は、特定の一商品が共通の価値尺度に選ばれるのはなぜか、そして最終的に金銀が価値尺度に選ばれるのはなぜか、である。アリストテレス以来、価値尺度としての貨幣の成立は、物々交換される二商品の交換比率を決定する

(16) Hutcheson, F., *A Short Introduction to Moral Philosophy*, in *Collected Works of Francis Hutcheson*, vol. 4, Hidesheim, 1969, pp.210-1.

(17) ただしハチスンは、『道徳哲学綱要』で、価値尺度としての貨幣が成立する必然性の説明をいっさい省いたにもかかわらず、歴史的な成立順序としては、最初に価値の尺度としての貨幣が成立し、やがてそれが流通手段に転化すると考えていた。

ために、第三の商品を共通の尺度として二商品の価値を測る必要から説明されてきた。しかし物々交換において、交換される相手の商品を尺度として直接に価値を測らずに、なぜ共通の尺度としての貨幣によって価値を測る必要があるのかという点は、必ずしも明確にされていなかった。スミスは、その理由を、物々交換の比率を記憶する便宜から説明する。

「人々が多くの種類の商品を取引する場合に、そのうちの一つが価値の尺度と考えられるに違いない。もしそこに3種類の商品、すなわち羊と穀物と牡牛しかないとすれば、われわれは容易にそれらのものの比例関係を記憶することができる。もし100種類の異なる商品があるときには、その一つ一つについて、残りの一つ一つとの比較から生ずる99の価値がある。これらの価値は容易に記憶しうるものではないから、人々は自然にそれらの商品の一つを共通標準として、それと残りすべてのものとを比較するようになる。これは当然、最初は人々がもっともよく知っている商品であろう。それゆえにわれわれは、黒牛と羊がホメロスの時代における標準であったことを知る。……これが価値の自然的尺度ともいべきものである。」⁽¹⁸⁾

スミスの説明は明快である。もし3種類の商品が物々交換されるだけなら、交換比率は3つである。100種類の商品が相互に交換されるときには、交換比率は各商品に99ずつで合計4950にも及び、とうてい記憶しきれぬものではない。しかしもし特定の一商品が共通の尺度に選ばれば、それと他の99の商品との交換比率を記憶するだけで、容易に4950の交換比率を計算することができるであろう。

この説明は非常にわかりやすいが、理論的には誤りである。たしかに交換比率を記憶する便宜は、価値尺度としての貨幣の成立を促した一つの原因であったかもしれないが、それだけでは価値尺度としての貨幣の成立を説明す

(18) Smith, A., *Lectures on Jurisprudence: Report dated 1766*, ed. R. L. Meek, D. D. Raphael, P. G. Stein, Oxford, 1978, p. 499. 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ法学講義』日本評論社, 1947年, 353-4 ページ。以下では、LJ (B) と略す。

ることはできない。かりに人々の記憶力が、4950の交換比率を容易に記憶できるほどにすぐれていたとしても、価値尺度としての貨幣は不要にはならなかったであろう。なぜなら、真の困難は、交換比率の記憶にではなくその決定に、すなわちさまざまな商品の価値を尺度し表現すること自体に存在するからである。しかしスミスは、『法学講義』では、商品の価値を表現することそれ自体のために共通の価値尺度が必要であるとは考えなかった。かれがその認識を得るのは、『国富論』にいたってからである。

次にスミスは、金銀が価値尺度に選ばれた理由を、価値尺度に必要な均質性から説明している。ものの長さの尺度として人間の身体の一部を使用する場合に、「一人の腕は他人のそれよりも長かったり短かったりして、一つを他と比較することができない」という不都合が生ずる。同様に、価値尺度としての牛や羊も同じ大きさではないから、正確な価値尺度とはなりえない。取引量が増えれば増えるほど、正確な尺度が要求される。こうして、「その等しい量が等しい価値を有するような一つの共通標準」にもっともふさわしいものとして、金属とくに金銀が選ばれたのである⁽¹⁹⁾。プーフェンドルフやハチスンは、価値尺度に必要な性質と流通手段に必要な性質とを区別することができなかったために、金銀が価値尺度になることと流通手段になることをしばしば混同した。スミスは初めて両者を明確に区別したのである⁽²⁰⁾。

価値尺度としての貨幣の成立を論証したあと、スミスは流通手段の必要性について、次のように説明している。

「パン屋や肉屋からパンや肉を欲しいと思う織布工は、かれの布と引き換

(19) Smith, A., LJ (B), p. 499. 邦訳353ページ。

(20) スミスは、貨幣が均質でなければならないことを、おそらくジョン・ローやハリスから学んだのであろう。貨幣として馬よりも銀が選ばれるのは、「銀が質の点で一定なのに、馬は著しく質を異にするからである」というジョン・ローの文章を、ハリスは引用している。Harris, J., *An Essay upon Money and Coins*, 2 parts, 1757-58, p. 36. 小林昇訳『貨幣・鑄貨論』東京大学出版会、1975年、48ページ。

えにそれらをいつも手に入れられるわけではない。そして鍛冶屋の生産物を欲しいと思うパン屋や肉屋も、自分の商品と引き換えにそれを手に入れられるわけではない。私はあなたの財貨を欲しいが、あなたは私のものを欲しくない。われわれは双方ともおそらく何かを欲しいのだが、互いの財貨を欲しいのではない。それゆえ、もしわれわれがある共通の交易用具を持たないならば、われわれの間にはいかなる交換もありえない。」⁽²¹⁾

これは、アリストテレス以来の物々交換の不便論である。スミスは、「価値の尺度が流通手段になるのでなければ、財貨は賢明に交換され得なかった」⁽²²⁾ので、最初は家畜、やがて金銀が、価値尺度になった結果として流通手段になったと述べている。かれは、価値尺度が流通手段になる理由を、おそらく次のように考えたのであろう。価値尺度は物々交換の段階に成立するのだから、流通手段の成立よりも歴史的に先行する。物々交換が終わって流通手段としての貨幣が成立すると、すべての商品が貨幣と交換されるようになるが、その交換に先だって、両者の交換比率を確定すること、すなわちすべての商品の価値を流通手段を尺度として測ることが必要である。もし価値尺度が流通手段になったのでなければ、そのときに二つの価値尺度が必要になってしまうであろう。

もっともスミスによれば、家畜が流通手段になった理由は、それがすでに価値尺度になっていたことだけではなかった。

「牧畜時代に、牛は商業の用具という目的に非常にふさわしいものであった。その時代にはだれもが牛や羊を持っており、何か商品と引き換えに好きなだけの牛や羊を受け取ることができた。それはかれの牛や羊の群に追加され、その維持に何の費用もかからなかった。というのは、当時は地表のすべ

(21) Smith, A., *Lectures on Jurisprudence: Report of 1762-3*, ed. R. L. Meek, D. D. Raphael, P. G. Stein, Oxford, 1978, p. 369. 以下では、LJ (A) と略す。

(22) Smith, A., LJ (B), p. 500. 邦訳355ページ。

てが共有の牧場だったからである。それゆえ牛は、だれもがもっとも受け取るものであり、だれもが支払うものであった。

しかし、土地がさまざまな所有者の間で分割され、その大部分が穀物の栽培に使用されるようになると、このことはもはや当てはまらなくなった。その時代には、だれもある一定数の牛だけを飼うことができた。さらに、土地をまったく持たないか、ごくわずかししか持たないために、多大の費用をかけずには牛を飼うことができない多くの人々がいた。……それゆえ、牛は、もはやこの共通の用具とはなり得なかったのである。』⁽²³⁾

流通手段としての貨幣の本質的要件は、だれもがそれを受け取るという一般的受容性にある。プーフェンドルフは、あるものを貨幣とする人々の合意が、それに一般的受容性を与えること強調した。人々が合意さえすれば、それ自体としては無価値なものも貨幣になりうるのであった。これに対してハチスンは、貨幣となるものは、それを貨幣とする人々の合意以前から、その自然的性質によって人々にひろく需要されると考えた。スミスは、ハチスンの議論をさらに一步進めている。牧畜時代に、牛が貨幣となったのは、人々の合意だけに基づくものではなかった。牧畜時代には、だれもが牛を持ち、そして牛を欲求した。この人々の生活状態そのものが、牛を価値尺度および流通手段として機能させたのである。言い換えれば、牛という一商品に他の商品とは異なる貨幣としての特別の地位を与えた究極の根拠は、人々が暮らす生活環境そのものにあった。したがって、農業時代になって人々の生活環境が変化すれば、牛は流通手段として機能しえなくなる。社会的分業が進み人々の生活が多様化すると、牛はもはや誰からも限りなく需要される商品ではなくなるからである。しかし商品交換の発展のためには、牛に替わる流通手段が存在しなくてはならない。そのときに金銀が流通手段になるのである。スミスは、金銀が流通手段に選ばれた理由として、すでに金銀は価値尺

(23) Smith, A., LJ (A), p. 369.

度になっていたことを指摘する。「金銀は価値の尺度となった結果、商業の用具にもなったのである。」⁽²⁴⁾さらに金銀は、流通手段にふさわしい素材として、維持費不要、耐久性、運搬容易性などの性質を備えていた。

以上のような『法学講義』の貨幣起源論は、『国富論』で大きく変化する。すでに述べたように、最大の変更は貨幣の二大機能の順序が逆転したことである。『国富論』では、流通手段が価値尺度よりも本源的であると考えられ、考察の順序も流通手段論が価値尺度論よりも先になった。

『国富論』でも、流通手段としての貨幣の起源の説明は、『法学講義』とほとんど変わっていない。すなわち、物々交換の不便論である。ただし、流通手段が価値尺度よりも先行すると考えられるようになったために、価値尺度が流通手段になるという『法学講義』の論理は、まったく主張されなくなっている。

流通手段が、家畜から金銀に替わる理由の説明も変更された。『法学講義』では、牧畜社会が終わると、家畜の維持費がかかるようになることが最大の理由であったのに対して、『国富論』では、家畜が分割不可能であることが理由とされる。すなわち、牛と塩との交換では、牛を分割できないために少なくとも牛一頭分の塩を買わなければならないのに対して、金属は任意の分割と再結合が可能であるために必要な分量の塩とだけ交換できるという理由である。この変更により、牧畜社会においても家畜だけでなく金銀が貨幣になることを説明できるようになった⁽²⁵⁾。

(24) Smith, A., LJ (B), p. 500. 邦訳355ページ。

(25) 奇妙なことに、『法学講義』のスミスは、貴金属が貨幣に適する理由として、その任意分割・再結合可能性にまったく言及していない。スミスは、価値尺度に必要な均質性に言及したときに、それと任意分割可能性とは同じことであると考えたのかもしれない。

一般に、貨幣素材に必要な性質は、価値尺度に必要な性質（均質性）と流通手段に必要な性質（耐久性、運搬容易性など）とに分けることができる。しかし任意分割・再結合可能性は、価値尺度と流通手段の両者に必要であることに注意しなければならない。この性質は、質的に等しく量的にのみ異なる価値を表現する価値尺度にも、また任意の大きさの価値と交換されなければならない流通手段にも必要なのである。

価値尺度としての貨幣の起源に関する説明は、『国富論』で根本的に変更された。アリストテレスからスミスの『法学講義』にいたるまで、価値尺度起源論の主題は不変であった。一つは、人々が商品の価値を測るときに、交換相手のさまざまな商品ではなく家畜のような特定の一品だけを共通の尺度とするようになるのはなぜか、もう一つは、最終的に金銀が共通の尺度になるのはなぜか、という問題である。言い換えれば、価値尺度が、①諸商品→②特定の一品→③金銀、と歴史的に発展する必然性の説明が問題であった。しかし『国富論』では、価値尺度論のこの問題設定そのものが根本的に変更されている。スミスが『国富論』で論じるのは、価値尺度の、①労働→②諸商品→③金銀、という発展の必然性である。

まず第一に、労働が価値尺度であることは、スミスの価値概念から導かれる。スミスによれば、商品の価値または交換価値とは、「特定の対象の所有がもたらす他の財貨に対する購買力」⁽²⁶⁾であり、購買力とは「そのとき市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配」⁽²⁷⁾である。したがって、価値は労働の支配力に等しく、価値の実質的尺度は労働であることになる。

次にスミスは、価値尺度としては、労働よりも商品のほうが「自然である」という。その理由は、労働量の割合を確定することが困難であること、商品は労働よりもしばしば他の商品と交換されること、労働は「抽象的観念」であるが商品は「目に見え、触知するしうる物体」であるからより自然であること、である。

そして最後に、価値尺度は諸商品から金銀へと発展する。「物々交換が終わり、貨幣が商業の共通の用具になると、あらゆる個々の商品は、ある他の

(26) Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. R. H. Campbell, A. S. Skinner and W. B. Todd, 2 vols, Oxford, 1975. p. 44. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波書店, 1969年, 第1巻, 102ページ。

(27) Ibid., p. 48. 邦訳106ページ。

商品と交換されるよりも、しばしば貨幣と交換される。……肉屋は、自分の牛肉や羊肉を市場へ持っていき、そこでそれらを貨幣と交換し、そのあとで、この貨幣をパンやビールと交換する。……パンやビールの量によって、つまりかれが別の商品を介在させて初めて交換しうる諸商品の量によって牛肉や羊肉の価値を評価するよりも、貨幣の量によって、つまりかれがこれらと直接に交換する商品の量によってそうするほうが、かれにとってより自然であり自明である。』⁽²⁸⁾物々交換では、交換される相手の諸商品が価値尺度であったのに対して、貨幣が流通手段になると、結果として必然的に価値尺度にもなるのである。

以上に述べた『国富論』の価値尺度論は、『法学講義』とは大きく異なるものであった。まず第一に、『法学講義』は価値尺度の歴史的発展を、『国富論』は論理的な移行を主題としている。『国富論』における価値尺度の労働から諸商品への移行は純粋に論理的なものであり、いかなる意味でも歴史的な発展ではない。価値尺度としての労働は、一つの歴史的段階を示すものではなく、あくまで「抽象的観念」にすぎないのである。また、価値尺度の諸商品から金銀への移行も、それ自体としては歴史的ではあるが、『法学講義』で考察されていたような、牛などの特定の一商品が共通の価値尺度や流通手段になる歴史段階は言及されていない。『国富論』におけるスミスの問題は、価値尺度の歴史的発展ではなく、価値尺度としての労働・諸商品・貨幣の論理的関係なのである。

そして第二に決定的に変わったのは、すでに述べたように価値尺度と流通手段の順序である。『法学講義』の価値尺度→流通手段という順序は、『国富論』では流通手段→価値尺度という順序に変更された。金銀は、流通手段にふさわしい性質を持つがゆえに貨幣となり、その結果として価値尺度にもなったのである。スミスは、『法学講義』で述べていた金銀の価値尺度にふ

(28) Ibid., p. 49. 邦訳108ページ。

さわしい性質（均質性）について、『国富論』ではまったくふれていない。

スミスが見解を変更した理由は、いろいろ考えられる。価値尺度論の主題が、歴史的な発展から論理的な移行へ変化した理由の一つは、スミスが『国富論』では不変の価値尺度の考察を主題としたからであった。別稿⁽²⁹⁾で検討したように、スミスは、重商主義批判のために、貨幣の価値変動の理論的説明を必要としていた。そのために、価値尺度論では、不変の価値尺度としての労働と、可変的な価値尺度としての貨幣との関係を明らかにすることが、主要な理論的課題となったのである。

では、スミスが、流通手段が価値尺度に先行すると考えるようになった理由はどこにあるだろうか。武田信照氏が指摘するように、「この転換は明らかに理論的後退を意味する」⁽³⁰⁾とすべきだろうか。スミスの理論的認識の深化と見ることはできないだろうか。以下では、この問題に関する一つの推測的解釈を述べることにしたい。

アリテテレス以来、価値尺度としての貨幣は、流通手段としての貨幣が成立する以前の物々交換の段階に、交換比率を計算するために成立したと考えられてきた。たしかに物々交換の発展とともに、流通手段としての貨幣が成立する以前にも、人々によく知られた財貨が共通の価値尺度として使用されることはおそらくあったと考えられる。しかし物々交換で最終的に必要なのは、交換される相手の商品で価値を表現することである。その計算に貨幣を介在させて行おうと、あるいは直接に行おうと、最終的な価値尺度になるのは交換される相手の商品である。したがって物々交換では、すべての商品が、共通の価値尺度としての貨幣によって価値を表現しなければならない必然性はない。物々交換の段階では、共通の価値尺度が成立しても、それに

(29) 前掲拙稿「スミス価値論の成立過程」。

(30) 武田前掲書、42ページ。武田氏は、スミスの転換の理由として、ハリスからの理論的影響、価値形態論の欠如、重商主義的貨幣論への批判の徹底などを指摘している。

よって価値を表現する商品は一部分にとどまったであろう。有名なスミスの例で言えば、狩猟社会でビーバーと鹿を交換する人々は、それぞれの動物を殺すために必要な労働時間の割合を知っていれば、第三の商品を共通の価値尺度として価値表現をしなくても、ビーバーと鹿の交換比率を直接に決定できるであろう。ビーバーの所有者が鹿を殺すために必要な時間を知らず、あるいは鹿の所有者がビーバーを殺すために必要な時間を知らない場合に、両者がともにその生産に必要な時間を知っている第三の商品を共通の価値尺度としてそれぞれの商品の価値を表現することが必要になるのである。

しかし、物々交換が終わり、さまざまな商品が流通手段としての特定商品と交換されるようになると、交換されるすべての商品が、交換に先だって、流通手段になった商品で価値を表現しなければならなくなる。スミスが『法学講義』で述べているように、物々交換の段階で不完全ながらも共通の価値尺度になっていた特定商品が、最初の流通手段になったであろう。そして多くの商品が流通手段になった特定商品と交換されるようになればなるほど、それに先だって、ますます多くの商品がその特定商品を価値尺度として価値を表現することが必要になったはずである。他方で、ますます多くの商品がある特定商品を価値尺度として価値を表現するようになればなるほど、実際にその特定商品と交換されることも多くなったであろう。商品交換の発展とともに、ある特定商品が流通手段になることと、同じ商品が価値尺度になることとは、相互促進的かつ並行的に進行し、結果としてますます商品交換を進展させたに違いない。そうであるならば、価値尺度が流通手段になることと、流通手段が価値尺度になることとは、論理的に矛盾するわけではなく、現実の相互促進的な過程の二側面を意味するにすぎないことになろう。価値尺度としての貨幣は、物々交換の発展だけでは決して完成することはなかったのであり、流通手段としての貨幣の発展と、その結果としての商品交換の全面的発展によってのみ、価値尺度としての貨幣も完成することができたであろう。このように考えるならば、『法学講義』から『国富論』への価値尺度

論の理論的転換は、スミスが価値尺度と流通手段の並行的かつ相互促進的發展を自覚したことの結果だったと言えるかもしれない。